

## はじめに

本書を手にしていただきまして、ありがとうございます。名古屋市で幼児から小学生までの英語教室「おやこえいごくらぶ」を運営している小田せつこです。

私は、中学1年生のときに初めて英語に出会いました。それから、あっという間に英語の虜とらになってしまい、これまで大手英会話教室、大手児童英語教室、私立中学校・高校・大学・大学院で英語を教えてきました。そして現在も、名古屋にある大学で、将来教師になる学生たちに英語を教えています。

私は2人の子ども(娘と息子)を授かると「子どもたちには、小さいうちから英語に触れさせたい」と思って子育てを始めました。とはいえ、家の中の会話は英語オンリーとか、学校はインターナショナルスクールといった、特殊な英語教育をしたわけではありません。私が行ったのは、子どもと接する毎日の生活の中に、少し英語を取り込むことでした。どのご家庭でも行っていること——たとえば、**絵本の読み聞かせやアニメの視聴などを、子どもと一緒に英語で楽しむようにしたのです。**

結果的に、子どもたちはバイリンガルに育ちました。私は「将来は2人とも、交換留学くらいするのか」と漠然と思っていた程度だったのですが、子どもたちは2人とも海外の高校・大学に進学することになりました。ちなみに、言語面では全く不自由なく過ごしていたようでした。そのうえ、それぞれ第二外国語もある程度身に付けることができ（娘は中国語、息子はフランス語）、現在では2人とも日本で専門職に就き、グローバルに働いています。

私は、英語を楽しみながら、たくましくバイリンガルに育った子どもたちを見て、「自分の子どもたちにしたように、全ての子どもたちをバイリンガルに育てあげたい」という思いを募らせました。そして、2013年、幼児から小学生までの英語教室「おやこえいごくらぶ」のレッスンをスタートさせたのです。

近年では英語の需要が高まり、子どもの英語教育も注目されるようになってきました。おかげで、幼児向けの英語教育について書かれた書籍や、英語を取り入れた育児を行っているママのブログなどが一気に増えました。私が子育てをしていた頃に比べて、本当によくの情報が手に入る便利な時代です。

ただ、「子どもの英語教育」と一言で言っても、その中身は多種多様。なかには、「3歳で英語ペラペラのちびっこバイリンガル」や「日本最年少で英検1級取得」を目指すような親御さんもいるかもしれませんが。でも、先ほど私の子育てについてお話ししたとおり、私はそんな極端な英語教育を勧めるつもりはありません。私が勧める**子どもの英語教育「おやこえいご」**は、「ムリなく、ムダなく、18歳でバイリンガルに！」がモットーです。

### ●英語は親から子どもへのプレゼント

「18歳でバイリンガルなんて、まだずっと先の話だ」と感じるかもしれませんが、しかし、子ども自身が「英語ができてよかった」と本当に実感するのは、人生の選択を始める18歳頃からでしょう。大学進学や職業などを考えるこの時期、「英語ができる」ことは子どもの人生の選択肢をぐっと増やしてくれます。

私は、「**英語は親から子どもへのプレゼント**」だと思っています。子どもの英語教育のゴールは、子どもに英語という強い味方を与え、子どもの将来の選択肢を増やすことではないでしょうか。子どものうちから英語に慣れ親しむことは、将来の英語学習のハードルをぐんと下げられます。それによって、本来なら英語に割く時間やエネルギーを、あなた

の子どもは「自分の好きなこと」に注ぐことができるようになるのです。

ただ、このプレゼントは、子どもにせがまれてから渡すようでは遅すぎますし、子どもに押し付けるように渡すのもよくありません。理想は、子どもたちが気付いたときには**「生活の一部に英語が当たり前にあった」という環境を作る**ことです。

こうした環境を作り、子どもたちが自然に英語というプレゼントを享受できるようにするために、**子どもの発達段階に合った英語とのふれあい**が大切です。ちなみに、英語のルール（文法やフォニックス）の理解を急ぐことや、単語の暗記をさせることは子どもの発達段階に不相応ですから、これらを幼児期に行うのは非効率的。何より、無理やりやらせて、子どもたちが英語を嫌がってしまったては本末転倒です。

幼児期にふさわしいのは、**「親子で楽しみながら英語に慣れ親しませること」**です。幼児期の子どもたちは「新しいものに対する柔軟性」を備えているだけでなく、非常に高いレベルの「英語の音に対する柔軟性」も持っています。これらは、大人が持っていない貴重な能力ですから、**幼児期には英語をたくさん聞かせることで、英語の音をインプットし、英語の理解能力をつけさせることが効果的**です。この時期に、たくさん英語に触れて楽しむこ

とができた子どもたちは、将来どんどん英語力を伸ばしていくことができるでしょう。

● **パパママに伝えたい「ムリなく、ムダなく」**

「おやこえいご」のモットーは「ムリなく、ムダなく、18歳でバイリンガルに！」だとお伝えしました。この「ムリなく、ムダなく」はいろいろな意味を含みますが、第一に「**パパママが、ムリすることなく、ムダな労力を使うことなく**」ということです。

子どもの英語教育に熱心な親御さんほど、「子どもの宿題を見てあげられていない」などと、自分を責めてしまう方が多いように感じます。でも、英語云々の前に、子育ては本当に大変なこと。子どもにご飯を食べさせ、外で遊ばせて、寝かしつけて——毎日それだけで一苦労ですよ。それに加えて、多くの方々が仕事や家事もこなしているのです。そんなパパママが、子どもの英語教育で、自分を追い詰めるほど頑張る必要なんてありません。

これが英語ではなく、スポーツや楽器の話で、将来は金メダルや賞を目指したい、というなら、もちろん特別な努力が必要でしょう。でも英語は、金メダルを目指す必要はない

けれど、これからの時代「みんなができたほうがいいこと」です。ですから、私の提唱する「おやこえいご」では、できるだけムダな労力を省き、パパママがムリなく続けられることを大事にしています。

また、「ムリなく、ムダなく」は経済面にも言えます。高額な英語教材を購入したり、インターナショナルスクールに通わせたりするのは、誰もができることではありません。「**おやこえいご**」ではあくまで、「**ごく一般的なお家庭で実践できる、経済的なやり方**」を紹介しています。

「18歳でバイリンガル」までの道のりは長いです。そして、子どもの成長に合わせて、その都度できることは変わってきます。だから「ムリなく、ムダなく」、お子さんの成長に寄り添いながら、お子さんと一緒に英語のある生活を楽しんでください。

長い道のりの間では、「英語なんて嫌だ!」と言われてしまう時期も来るかもしれません。でも、そこであきらめなければ、いずれ子どもが大きくなって、必ず「英語ができてよかったです」と喜んでくれる日が来ます。

実は、この本を書こうと思ったきっかけは、私自身の子どもたちの言葉でした。「おやこ

えいご」で育てた我が子が、いよいよ結婚する年齢になり、彼ら自身が自分の子ども（私にとっては孫）の教育を考えるようになって、「お母さん、子育ての方法を教えてください。何か書いておいて！」と言ってきたのです。子どもたちが、「母の教育のおかげで今の自分がある」「自分も同じように子どもを育てたい」と思ってくれているなんて、こんな嬉しいことはありません。

本書では、「**おやこえいご**」の進め方、年齢別の効果的な学習法、おすすめの英語コンテンツなどを紹介していきます。また、**子どもの英語教育における、お金の貯めどき**と**「使いたいどき」**といった、経済面のお話も盛り込んでいますので、英語教育を計画的に進めることができます。

「自分の子どもには、ぜひ英語を身に付けてほしい。でも、どうしたらいいのかわからない」という全てのパパママに、本書の「おやこえいご」が少しでもお役に立てれば幸いです。そして、全ての子どもたちに英語との幸せな出会いがありますように。

2019年5月 小田せつこ

はじめに

Chapter  
**1**

「おやこえいご」とは

英語習得の必要性

英語はチャンスに恵まれる言語／「やる気」ほど不確かなものはない

18

「おやこえいご」とは？

ムリなく、ムダなく、バイリンガルに！／「おやこえいご」の特徴／

英語は親から子どもへのプレゼント／「おやこえいご」は、大いなる助走

25



## 「おやこえいご」はこう進めよう

なぜそんなに早く英語に触れるべきなのか？

46

「おやこえいご」を始めるのは今！／学校でいい英語の先生に出会えるかどうかは運次第  
赤ちゃんは語学の天才／「おやこえいご」で、日本語がおかしくなることはない！／  
早く始めることで、親自身の準備ができる

「おやこえいご」の経済学……

59

お金の貯めどき使いどき／英語教育にかかるお金の種類

「おやこえいご」成功の決め手は「インプット」……

66

「おやこえいご」では「インプット」を重視／  
幼児期のインプット段階でやってはいけないこと

「ポイント」は「英語で動画」と「幼児英語教室の活用」……

72

「おやこえいご」の道のり／1歳半～幼稚園までに「動画」で英語の大量インプットを／  
週1回の英語教室は、パパママの強い味方

## 動画で楽しむ「おやこえい」

英語のインプットには「動画」が最適！

- 動画がおすすめな理由1 子どもに「英語は言語」と認識してもらえ
  - 動画がおすすめな理由2 英語がわからなくても楽しめる
  - 動画がおすすめな理由3 パパママの負担が少ない
- なぜ聞くだけではなく動画を見るのがいいのか／動画を長時間見せたくないという方へ

英語動画はこうやって楽しむ！

- 子どもが夢中になれる動画を見せよう／英語動画の始め方／
- 英語動画の視聴方法とおすすめ動画／おすすめ動画視聴方法をもっと詳しく！／
- いづれやってくる英語イヤイヤ期対策

## 幼児英語教室に行こう

なぜ幼児英語教室に通ったほうがいいのか

英語教室に通うメリット／「おうち英語」は慎重に

## Chapter

## 5

## 月齢別・年齢別！「おやこえいご」の進め方

## 英語教室の効果を最大限に引き出すために

英語教室は途中でやめない！／レッスンの英語環境は大切

## いい英語教室はこうやって選ぶう！

- いい英語教室の基準1 先生の英語力が高いこと
- いい英語教室の基準2 先生が子ども好きで、子どもの発達段階に合わせ、ベストな指導法を追求していること
- いい英語教室の基準3 楽しいレッスンで、しかも学びがあること

## 英語の取り組みの進め方

## 0歳～1歳半の「おやこえいご」

4ヶ月までのベビーとのふれあい遊び／5ヶ月～8ヶ月のベビーとのふれあい遊び／9ヶ月～1歳半までのベビーとのふれあい遊び

173

168

160

144

1歳半〜幼稚園前の「おやこえいご」……………182

この時期の十分なインプットが「おやこえいご」成功の鍵／インプットは動画を中心に

幼稚園の「おやこえいご」……………187

幼稚園で英語イヤイヤ期に突入!?

小学校低学年の「おやこえいご」……………196

「英語耳の維持」を目標に!

小学校高学年の「おやこえいご」……………201

英語の頑張りどき!／英語の発音を身に付けよう／文法は間違えながら身に付けよう

中学校・高校の「おやこえいご」……………207

「思春期の難しさ」を理解しよう／中学では文法理解を深め、音読をしよう／

子どもに海外経験をプレゼントするために

## 「おやこえいご」のQ &amp; A

- Q 英語の語りかけに自信がない……………230
- Q 幼児英語のセット教材は買うべきか……………234
- Q 英語は幼稚園からでは手遅れなのか……………237
- Q 子どもがなかなか英語を話さない……………239
- Q オンライン英会話の始めどき……………240
- Q 英検などを目標にすることについて……………242

付録 「おやこえいご」おすすめの歌・ライム

## コラム

- 1 バイリンガルならではの特徴……………40
- 2 英語はネイティブを目指さなくていい!……………90
- 3 英語以外の生活も充実させよう……………221
- 4 最近よく聞く「フォニックス」っていいの?……………225

## Chapter 1

「おやこえいご」とは

A B C

## 英語習得の必要性

### ●英語はチャンスに恵まれる言語

英語は、「Language of Opportunities」(チャンスに恵まれる言語)とされています。「事実上、国際共通語として機能している唯一の言語」が英語なのです。グローバルな視点で世界をとらえれば、英語の持つパワーはとても強いことがわかります。

最も理想的なのは、英語に限らずさまざまな言語を話すことができること。ただ、いきなり何ヶ国語も身に付けることは難しいですから、「まずは、世界で共通語となっている英語を身に付ける」というのは自然な選択だと思います。

しかし、日本には、英語不要論もまだまだ根強く残っています。「ほとんどの日本人は、将来も日本に住み、日本で働く。海外に出る人なんて少数だろう。だから、そこまで英語に力を入れる必要はない」という意見です。他にも「英語以外にもっとやるべき大切なことがある」「英語より日本語のほうが大切」「英語さえできればいい、というものではない」といった声があります。



しかし、英語の重要性が昨今ますます大きくなってきていることは、否めない事実です。今の日本には、日本語ができなくても、英語さえできれば就ける仕事がたくさんあります。外資系ではなく日本企業でも「新入社員の9割が外国籍」という会社があるほど、グローバル化は進んでいるのです。

確かに、英語以外にもやるべきことはありますし、日本人にとって日本語は大切です。から、英語さえできればいいわけではありません。「**おやこえいご**」では、あくまで**日本語を中心とした生活を送り、英語以外のことも大切にしたいうえで、日常に少しずつ英語を取り入れていくのです**。英語を取り入れることで、他の何かを犠牲にしようということではありません。

最近では、AIの発達により「自動翻訳機ができるから、英語など必要ない」という意見も出てきました。これに対しては「本気ですか!？」と、がく然とします。いくら機械が発達しても、「人間の役割」は残ります。そもそも、翻訳機が高度に発達し、人間による翻訳・通訳が不要になるときがやってくるとして、それは一体いつになるのでしょうか。いつ来るのか、明確にはわからない未来の話です。それなのに「機械が発達するから、英語をやる必要はない」などと言うのは無責任すぎるのではないのでしょうか。現に「計算機があるから、

計算しなくていい」「そのうち車は自動運転になるから、教習所に通う必要はない」という世の中ではありません。英語だって同様です。

「そんな小さいうちからやらなくても、英語が必要な状況になったらやればいい」という意見もあるかと思えます。もちろん必要に迫られれば、最低限の英語は習得できるでしょう。しかし、必要に迫られてから勉強して身に付く英語は、本当に限定的なものだと思います。

一つわかりやすい例をあげてみましょう。私が韓国の航空会社、大韓航空で韓国に行ったことです。

チェックインの際に、カウンターの韓国人スタッフの方が「お座席は、窓側と通路側、どちらがよろしいですか？」と、とてもきれいな日本語で対応してくれました。私は、「どちらでもいいです」と答えたのですが、この方は「どちらでもいい」という日本語を知らなかったようで、伝わりませんでした。

このように、限定的な決まったフレーズしか話すことができない状態を、本当に「外国語ができる」と言えるのでしょうか。英語教育の世界では、English for Specific Purposes

(特定の目的のための英語)、略してESPと呼ばれる新しい分野があります。大学でも、理系の学生に合わせた英語教育、医学生に合わせた英語教育など、それぞれの専門分野に合わせた英語教育が必要だと言われています。確かにそれは重要なのですが、私が「おやこえいご」で育んでいただきたいのは、そのような英語力ではありません。

多くの方々にとって、英語力の一つの目安となるのは「仕事で使える英語力」ではないでしょうか。私は以前、大学生向けの「ビジネス英語コース」の講師を担当したことがあります。そのとき、「一体何を教えたらいいのだろうか」とカリキュラムに悩み、外資系薬品会社で働く幼馴染みにたずねました。

私は、プレゼンや電話会議などで使える英語を想定していたのですが、彼女から返ってきたのは意外な言葉でした。「私、仕事の英語はなんとかできるのよ。でも、仕事の後のソーシャルの場で、外国人と談笑したりはできないの。それができたらすごくいいんだけど」

いわゆる「ビジネス英語」という言葉がありますが、**実際のビジネスの現場で求められるのは「雑談」ができるくらいの高い英語力**なのです。「雑談力」は、ビジネス上のコミュニケーション

ーションを円滑にする力として、日本においても重視されており、最近では「雑談力」を身に付けるための本もよく見かけます。それも、「英語ができればいいわけじゃない。まずは話の中身が大事なんだ」などと言う方もいるのでしょうか。

確かに、雑談力に必要なのは言語能力だけではなく、物事への幅広い興味関心や読書量、ユーモアのセンスなども求められます。ですから、「英語さえできればいい」というわけではないでしょう。

しかし、**いくら雑談力を身に付けたとしても、英語力が伴わなければ、当然その力を発揮することはできません。**ですから、グローバルな雑談の場では、「話の中身」に加えて、それを伝える「英語力」も必要です。話の中身が大切だからと言って、英語をおろそかにしていいわけではないのです。

彼女が言っていたように、仕事に関することは英語で話せる人にとっても、「目的なしに」「必要性なしに」話す雑談は非常にレベルが高いのです。最低限必要な英語だけでいいのであれば、必要になってから勉強すればいいでしょう。しかし、雑談ができるほど高度な英語力を身に付けるのは、並大抵のことではありません。「必要に迫られてからやる」のではなく、遅すぎることです。

**◎「やる気」ほど不確かなものはない**

私は自分自身、「英語ができて本当によかった」と思っています。海外に行くときは、英語でしっかりコミュニケーションが取れる、という大きな安心感があります。また、日本語しか話せなかったら出会うことのなかったであろう人たちと、たくさん友達になれました。そのうえ、英語力を生かして仕事をする事ができています。英語のおかげで、私の人生はどれほど豊かになったことでしょう。

ですから、自分の子どもたちを早くから英語に親しませることに、全く迷いはありませんでした。ただ、周りの人たちからはよく言われました。「そんなに小さいときから英語をやらなくても、本人に『やりたい!』という意欲が出てからでいいんじゃないの?」と。

しかし、このような意見には、疑問を抱かざるを得ません。もし、本人のやる気が全く出なかったらどうするのでしょうか。「いつか絶対にやる気になる」なんて、誰が保証できるのでしょうか。

それに、やる気が出た人は、みんな必ず英語ができるようになっていくのでしょうか。残念ながら違いますよね。英語ができるようになってたくて英会話教室に入っても、一向にで

きるようにならない人は大勢います。たとえば海外留学に行っても、すんなり英語をモノにできない人も多いのです。

私みたいに英語オタクで、英語に膨大な時間を費やせる人にとっては可能かもしれない。しかし、「英語にはあまり時間を割きたくない」というのが、多くの方々の本音ではないでしょうか。また、好き嫌いにかかわらず、語学の適性がずば抜けて高い人もいます。そう。そういう人は、膨大な時間を費やさなくても、スムーズに英語を習得できるかもしれません。しかし、みんながみんな英語オタクではありませんし、語学の適性が高い人ばかりでもありません。

それに、英語オタクの私でさえ、英語のアウトプットやコミュニケーションには、多大な苦勞をしました。私が初めて英語に出会ったのは、中学1年生のときです。英語との出会いは、私自身はそんなに早くなかったのです。しかし、その後すぐに英語にハマってしまい、英語のラジオ放送、テレビ番組、音楽、映画、雑誌など、とにかく英語をむさぼりました。

自分一人で英語を楽しんでいる間はよかったのです。楽しくて仕方ありませんでした。しかし、アウトプットでは、「言いたいことが英語にできない、伝わらない」というジレン

マを味わいました。そんなときには、本当に心が折れそうになったものです。

私のように英語が大好きな人間にとってさえ、英語学習は多大な苦勞を伴うのです。「外国語ができるようになること」は、想像以上に労力と時間がかかるもの。英語は「やる気さえ出れば、大人になってからでも簡単に身に付けられる」ものではないのです。

## 「おやこえいご」とは？

### ●ムリなく、ムダなく、バイリンガルに！

さて、ここまでお話ししてきたとおり、これからの時代「**英語は絶対にできたほうがいい**」ことは間違いないありません。英語ができるだけで、将来の仕事の選択肢は格段に増えます。英語ができるだけで、出会える人やものが増えて世界が広がるのです。

でも、大人になってからの英語学習は本当に大変。それを身をもって経験しているからこそ、**子どもの英語教育はできるだけ早めに始めてほしい**と思っています。私の時代とは

違い、子どもたちが初めて英語に出会うのは小学校に早まりました。それでも、「学校で英語を教わるまで何もしない」というのは、おすすめてできません。

「そうは言っても、子どもの英語教育って、何から始めればいいのかわからない」「自身自身の英語力があまり高くないから、子どもに教えるなんてできない」と、頭を抱えている親御さんは大勢いらっしゃいます。私は現在名古屋市で、幼児から小学生までの英語教室「おやこえいごくらぶ」を運営していますが、そうした親御さんの悩みを解決し、「全ての子どもたちをバイリンガルに育てたい」という思いから、「おやこえいご」のレッスンを始めたのです。

私の提唱する「**おやこえいご**」のモットーは「**ムリなく、ムダなく、18歳でバイリンガルに!**」です。この「ムリなく、ムダなく」には複数の意味が含まれていますが、第一は「**パパママが、ムリすることなく、ムダな労力を使うことなく**」ということです。

ですから、英語があまり得意でないパパママに、「子どもには、どんなときも英語で話しかけましょう」と言ったり、全てのご家庭に「インターナショナルスクールに通わせましょう」なんて無理は言ったりはしません。「**おやこえいご**」は、**パパママに高い英語力がなくても、高い学費を払わなくても実践できるものです。**



世の中には、子どもが小さいうちから英検の勉強をさせるような英語教室もあります。私の友人にも、こうした英語教室に子どもを通わせた方々がいます。しかし、子どもを英語ペラペラのバイリンガルに育てられた方は、残念ながら一人もいません。こうしたスパルタ式の英語教室で成果を出せるのは、本当にわずかな方に限られると思います。

子どもの英語教育には、家庭での親御さんのサポートが不可欠です。しかし、スパルタ式の英語教室は、親御さんのサポートに非常に多くのことを求める傾向があります。そのため、求められるサポートが重すぎて、脱落してしまう親御さんが多いようです。私は、家庭でのサポートに頼り、パパママに責任転嫁をするようなやり方には賛同できません。

繰り返しますが、「**おやこえいご**」の**モットー**は「**ムリなく、ムダなく**」です。世の中のパパママはとても忙しい。子どもにご飯を食わせて、着替えさせて、寝かせるだけで、もういっぱい입니다。そこへ、宿題に追い立てられるような英語教室に通わせ、「子どもの宿題を見てあげられない私は悪いママ」と、プレッシャーを感じるなんて、こんなつらいことがあるでしょうか。パパママが、そんなに頑張る必要なんてないのです。

スポーツや楽器を極めるためには、小さいうちから特別な練習が必要だと思えます。金メダルを目指したり、賞を取りに行くためには、親も子どもも頑張らなければいけないで

しよう。でもこれは、すぐやりたい子たちが頑張ればいいことです。反対に英語は、金メダルを目指さなくてもいいけれど、現代では「みんなができたほうがいい」ことではないでしょうか。ですから、**子どもの英語教育は、親御さんが誰でも続けられて、子どもも楽しく取り組めることが大切**なのです。

## ◎「おやこえいご」の特徴

私のおすすめる「おやこえいご」の定義は、「親子のふれあいを楽しみながら英語に親しむこと」です。「子どもに英語を教える」ことではありません。私たち親がすべきことは、子どもが小さいうちに英語に触れさせ、慣れ親しませることなのです。

「遊んでいるだけで、ちゃんと英語が身に付くのだろうか」と、疑問に思われる親御さんも多いでしょう。しかし、まだ日本語も拙いつたな小さな子どもに、ひたすら英単語を教え込んだところで、英語は身に付きません。飛びぬけた天才児であれば、身に付くこともあるかもしれませんが、それはかなりのレアケースです。

今、この本を読んでくださったっているパパママのなかには、「子どもがペラペラ英語をしゃべる姿を早く見たい」と思っている方々もいらっしゃるでしょう。その気持ちはとてもわかります。私も、自分の子どもたちが英語を口にするのを聞いたときは、とても嬉しかったです。それは、ピアノや水泳が上手になったら嬉しいのと同じような感覚だと思います。もっとさかのぼると、ハイハイができるようになった、歩けるようになったというのも同様。とにかく、親にとって子どもの成長はこの上なく嬉しいものですよね。

しかし、英語に関しては、その気持ちを少し脇に置いておいてほしいのです。英語教育は大事ですが、それは「子どもの元気な成長」あつての話です。子どもは第一に、愛情に包まれた、健康で楽しい生活を送るべきです。

「ムリなく、ムダなく」バイリンガルを目指す「おやこえいご」では、日本語も英語もペラペラの、ちびっこバイリンガルを育てるわけではありません。年齢に合わせた子どもらしい生活を大切にしながら、その生活に少し英語を取り入れ、将来への「英語の種まき」をするのです。

子どもたちには、まず一つ「日本語をマスターする」という大きなお仕事があります。もちろん簡単なことではありません。当たり前前に日本語に囲まれた環境にいと、子どもは自然に日本語をマスターしているように見えますよね。

でも実は、「たくさんのインプット」と「たくさんのアウトプット」が保証されているからこそ、日本語をマスターできているのです。英語を身に付けるために、日本語の環境が損なわれるようなことがあったら、それこそ英語も日本語もできなくなってしまいます。それでは困りますよね。常識を超えるほど英語漬けにしてしまうと、日本語を全く遠ざけてしまうなど、極端なことは避ける必要があります。

もちろん例外のご家庭もあります。たとえば、パパかママが英語の達人で、家庭で英語での会話が可能であったり、インターナショナルスクールに通わせたりしている場合です。こういう場合は、日本語と英語を同等に伸ばすこともできるでしょうし、日本に住みながら英語を第一言語とすることも十分可能ですから、「ちびっこバイリンガル」を育てることができるかもしれません。

日本人の両親が、子どもを日本の学校に通わせながら、バイリンガルに育てた例として、有名な書籍を2冊ご紹介しましょう。一つ目は、『ヒロシ、君に英語とスペイン語をあげる

よ』(1986年、草思社)で、私は自分の子育てのときにこの本を手にしました。アメリカ文学者である北村崇郎氏と、ラテンアメリカ文学者である妻・光世氏が、ひとり息子の洋氏を英語、スペイン語、日本語のトリリンガルに育てたことについて書かれています。もう一つは、『バイリンガルを育てる―0歳からの英語教育』(2000年、くろしお出版)で、英語教育の専門家であり、立命館大学教授の湯川笑子氏が、同じく英語教育専門家の夫・純幸氏と、バイリンガル育児を行った経験をまとめています。

これらの書籍を読むと、両親ともに英語が堪能であったり、英語教育のプロであっても、「バイリンガル育児は本当に大変だ」ということがわかります。北村家のケースでは、父親の大変厳格な態度と、母親の揺れる心情が描かれています。「学校の勉強に、クラブ活動に、ピアノの練習に、英語に、しかもそのうえにスペイン語と、そんなにぎゅうぎゅうつめこんで息子がパンクしないのだろうか」(p.160)と言って、息子のスペイン語教育を少し抑えるなど、母親として子どもを心配する気持ちが痛いほど伝わってきます。

そして、ひとり息子を育てた北村家に対して、湯川家は2人兄妹。湯川氏によると、バイリンガル子育ては「言語を親がコントロールしやすい第1子が最もうまくいくが、第2子以下は難しい」、「子ども1人1人の個性によって、弱い方の言語のサポートの仕方が変わ

ってくるので、同じことをしていてもバイリンガルに育つたり、育たなかったりする」(p.301)ということ、別の苦労があることがわかります。英語教育のプロである湯川氏にさえ、「英語力と、子どもにかけてやれる時間、エネルギー、お金の他に、バイリンガル子育ての最後の条件として、私は、精神的ゆとり、そしてそこから生まれる強さが不可欠なのではないかと思う」(p.299)と言わしめるほど、バイリンガル育児は困難なことなのです。誰もが気軽にできるわけではありません。

このように、本格的なバイリンガル教育をして、ちびっこバイリンガルを育てることは、かなりハードルが高く、誰にでもおすすめることができるものではありません。とはいえ、バイリンガル教育は大変だから「何もやらない」という選択をするのは極端すぎます。そこで、「**ムリなく、ムダなく**」の「**おやこえいじ**」なのです。先に書いたとおり、「**おやこえいじ**」では「ちびっこバイリンガル」を育てることは目指していません。「**おやこえいじ**」が**目指すのは「18歳でバイリンガル」**です。

## ●英語は親から子どもへのプレゼント

「18歳なんて、まだまだ先じゃなか」と思われるかもしれませんが、確かにまだまだ先でしょう。でも、本当に英語が必要になったり、英語ができることの恩恵にあずかったりするのには、このくらいの年齢からではないでしょうか。18歳というのは、大学に入学する年齢です。そのときに英語ができれば、海外留学を選ぶこともできるのです。

私自身、自分の子育てでは「18歳になったときに、英語をある程度使えるようになっていく」ことを目標にしていました。ですから、必死に英語漬けの子育てをしたわけではありません。英語オンリーの語りかけをしてきたわけでも、インターナショナルスクールに通わせたわけでもありません。むしろ、子どもが小学生になるまでは、英語以外の育児に手間ひまをかけてきた自負があります。

子育てについて、私はこう考えています。

**「英語に労力と時間を割きすぎないバランスの良い子育てを通して、子どもの身体能力、知的好奇心を育む。そうすることで、人生の選択肢を増やしてやり、18歳からは子ども自身が自分の人生を切り開いていってほしい」**

「おやこえいご」で育てた私の2人の子どもたちは、結果として2人とも日英バイリンガルに育ちました。そのうえ、それぞれ第二外国語もある程度身に付けることができ(娘は中国語、息子はフランス語)、今では専門職に就いてグローバルに活躍しています。

最終的に子どもが何に興味を持ち、将来的に何を極めていくのかは、子ども自身が決めること。私たち親にできるのは、**子どもが「選択肢の多い人生」を送れるような環境を作ってあげる**ことではないでしょうか。

そして、子どもの選択肢を増やしてあげるのに、英語ほど強力な味方はありません。「**英語は親から子どもへのプレゼント**」なのです。子どものうちから英語に慣れ親しむことは、将来の英語学習のハードルをぐんと下げてくれます。それによって、本来なら英語に割く時間やエネルギーを、あなたの子どもは「自分の好きなこと」に注ぐことができるようになるのです。そして、お子さんがそれを極めていくときに、英語が一つの手段として、お子さんの強い味方になってくれることでしょう。

ただし、**このプレゼントは、子どもにせがまれてから渡すようでは遅い**のです。その頃には、親にしてあげられることは、ほとんどないからです。反対に、子どもに押し付けるように渡すのもよくありません。英語がプレッシャーになり、子どもが追い込まれたりして



は、プレゼントにはなりません。

理想は、「子どもたちが気付いたときには**「生活の一部に英語が当たり前にあった」という環境を作ること**です。それは、パパママの工夫でいくらでも可能です。しかし、あくまで「ムリなく、ムダなく」です。

パパママが、そこまで英語が得意でなくても構いません。英語漬けの生活にしたり、英語で語りかけをしたりする必要なんてありませんし、インターナショナルスクールに通わせる経済力も必要ありません。

大切なのは、**子どもが小さいうちから英語に慣れ親しみ、楽しむこと**です。ですから、まずは目標として、日本語の3分の1でいいので**毎日の生活に英語を取り入れてみてください**。それが難しければ、5分の1、もしくは10分の1でも構いません。英語のアニメ、音楽、絵本など、良質なコンテンツはすでに世の中にたくさんありますから、こうしたコンテンツを使って、子どもと一緒に遊んでください。

かわいい我が子とふれあい、今しかない我が子との時間を楽しみながら、そこに少し英語を足してあげる——そうすることで、時間的・経済的な負担なく、**子どもに「英語の種まき」をしてあげましょつ。**

## ◎「おやこえいご」は、大いなる助走

もちろん、まいた種が芽を出し、しっかりと花を咲かせるために、少しは努力が必要です。「おやこえいご」でバイリンガルの基礎を作っていたとしても、後からしっかりと英語の学習をしなければ、18歳でバイリンガルにはなれないのです。これを聞いて、「結局、後から勉強しなきゃいけないのか」とがっかりされた方もいるかもしれませんが。

そこで、幼児教育の専門家である私の友人Tさんの言葉を用いることにしましょう。「英語に関しては、やたらと見通しの甘い人が多い」と、彼女は言っています。たとえば、子どもにピアノを習わせて「そのうち音大くらい行けるようになるだろう」とか、水泳を習わせて「オリンピックはともかく、全国大会くらいは行けるだろう」とは、あまり思わないのではないのでしょうか。思う人がいたとすれば、それは毎日ママがピアノを指導しているとか、水泳の選手コースに通っているとか、かなりの時間をピアノや水泳に費やしているご家庭のはずです。それなのに、どうして英語となると、たった週1回のレッスンに通うだけで、「簡単に身に付くだろう」と過大な期待をしてしまうのでしょうか。

英語だって、ピアノや水泳のように、モノにするにはそれなりの時間を費やす必要がある

ります。ですから、小さいうちに英語を始めたとしても、後からの勉強は必須なのです。その点は覚悟してください。でも英語は、ピアノや水泳のように、ほんの一部の人しか高いレベルに到達できない、というものではありません。正しいやり方で早くから始めれば、**誰でも高いレベルに到達できるという意味では、英語はともモノにしやすいのです。**

私は以前、帰国子女の多い大学で英語講師をしていたことがあります。そこで感じたのは、英語がよくできる帰国子女は、2段階の海外滞在をしているケースが多い、ということでした。一度目は2歳〜3歳の頃、そして二度目は小中学生になってから。こういう子たちは、幼稚園や小学校低学年の頃は日本にいたので、日本語も問題なく身に付いています。そのうえ、英語も高度なレベルなのです。

反対に、小さい頃から海外にいても、小学校の途中で帰国した子たちの英語力は、全く残っていないか、残っていても子どもレベルでした。やはり「英語ができる」と言えるレベルになるには、大きくなってからしっかり勉強する必要がありますのです。

しかし、適切な早期英語教育によって、そのハードルを下げるすることができます。3歳頃までの比較的自由な時間が多い時期、英語への先入観がない時期に、自然と英語に親しん

でお願いだけで、後の英語学習がぐんと楽になるのです。中学生になった我が子に、「英語を勉強しなさい」と言わなくて済むだけでも、親としては精神衛生上ありがたいことではないでしょうか。

「**「おやこえいこ」は、あくまで18歳でバイリンガルになるための「助走」です。しかし、それは「大いなる助走」です。**この助走をしているかどうかで、完走率が変わってしまうほど、大きな意義を持つものなのです。そしてこの助走に、子どもの意志や能力は関係ありません。子どもの完走率を少しでも上げてあげること、子どもが英語を味方につけて未来に羽ばたいていく下地を作ってあげることが、親の少しの心がけでできるのです。